田中忠雄・その生涯と作品――田中忠雄はなぜ聖書画を描くようになったのか――(東北学院大学キリスト教文化研究所主催研究フォーラム)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 知雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000293

研究フォーラム

田中忠雄・その生涯と作品

～田中忠雄はなぜ聖書画を描くようになったのか～

田　中　知　雄

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました，田中知雄です。ご紹介くださった名取教会の荒井偉作牧師とは，国際基督教大学（ICU）で同期でした。荒井先生，ありがとうございました。本日は「田中忠雄･その生涯と作品　～田中忠雄はなぜ聖書画を描くようになったのか～」と題して，彼を一番近くで見てきた家族（孫）の立場からお話ししたいと思います。

田中忠雄の経歴と画風

田中忠雄を一言で書き表すと「20 世紀日本を代表する洋画家・キリスト教画家」ということになると思います。その生涯は 1903 年から 1995 年までですので，ちょうど 20 世紀という時代にすっぽりとおさまっています。戦後すぐの 1945 年に 7 人で立ち上げた行動美術協会は今や，全国に支部を持つ大きな団体に成長しています。その後，日本美術家連盟の理事になり，理事長も 1 期務めました。そして，20 世紀日本のキリスト教画家の代表としては真っ先に，田中忠雄と渡辺禎雄の二人の名前が挙がると思います。1973 年にはこの二人や，カトリック教会のメンバーも一緒にキリスト教美術協会を立ち上げています。

田中忠雄はその画風から，「日本のルオー」と称されることもあります。アンリ・ジョルジュ・ルオーは 19 世紀から 20 世紀にかけて活躍した著名なフランスの画家ですので，たいへん光栄なことですが，確かに二人の代表作を見比べてみると共通する要素がいくつもあります。人物の輪郭などは太く力強い線で描かれており，独特な色づかいも印象的で

TRI サナトロジー研究所

す。描写対象のプロポーションや形状もデフォルメされており，写実性や美しさよりも何を強調して伝えたいかを重視する「表現主義」に分類されます。ただ，デフォルメによって本来の形状は崩しても抽象的にではなく，何が描かれているのかは分かるので「具象画」と呼ばれています。また，数多くのキリスト教絵画を描いている，という点も同じです。田中忠雄の代表作には，中世初期ロマネスクの壁画やルオーの影響が見られるのです。

東北学院大学・泉キャンパスチャペルのステンドグラス

そんな田中忠雄の代表作の一つが，この東北学院大学にもあります。現在は建物が改修工事中ですが，泉キャンパスチャペルの計 9 枚のステンドグラスは田中忠雄のデザインによるものです（**図 1**，36 ページ）。ステンドグラスは，色ガラスを繋ぎ合わせて造るものですからその強度が重要で，太く力強いアウトラインの田中忠雄の画風はまさにうってつけでした。実際にチャペルの中に立って正面にある，天にまでも届くような高さの作品を見上げると，その迫力に圧倒されます。ここにはキリストの受難から昇天までが描かれていますが，チャペルの側壁の 8 枚はキリストの生涯図です。皆様にも是非，実物をご覧いただきたいと思います。これと並ぶステンドグラスの大作が，田中忠雄自身が教会員であった東京・赤坂の霊南坂教会にある『語りかけ給う神』です。こちらは横幅が 13 m と長く，絵巻物風に聖書物語が描かれています。他にも京都の同志社大学神学部のチャペルなど，全国各地に田中忠雄のステンドグラス作品があります。

田中忠雄の主要聖書画作品

田中忠雄の油彩画の代表作として挙げられるのが，東京国立近代美術館所蔵の『基地のキリスト』です（**図 2**）。1953 年に制作されたこの作品の画面背景には，戦後すぐの東京・立川にあった駐留米軍基地が描かれています。主に米軍兵相手に夜の仕事をしている女性たちを守ろうとする主イエス・キリスト。田中忠雄はローマ帝国に支配されていた二千年前のパレスチナと戦後の日本を重ね合わせてこのような場面を創作したのです。聖書の世界と当時の社会問題を重ね合わせて表現したこの作品が高く評価されたことを一つのきっかけとして，田中忠雄はこの後，数多くのキリスト教絵画を描いていくことになるのです。

『基地のキリスト』は聖書画としては異色の作品ですが，本来の聖書の中のこの場面が描かれているのは『地にもの書く人』という作品です。この主題の作品は数多く制作されており，関西学院大学をはじめ，全国各地で見ることができます。関西学院大学では田中

忠雄の作品を数多く所蔵しており，この 2023 年の春にはそれらを集めた展覧会が学内の博物館で開催されました。『ユダの足を洗う』『トマスの疑い』などの作品があります。『ユダの足を洗う』もユニークな主題で, 実際の聖書にはそのような記述はありません。ただ, キリストは弟子たち全員の足を洗っているので，当然その中には直後にキリストを裏切ることになるユダも含まれていたはずであると，田中忠雄は考えたのでしょう。何とも気まずそうなユダの表情が印象的です。従来は，神戸 YMCA 所蔵の『弟子の足を洗う』のような作品が一般的で，これはおそらく一番弟子であるペトロの足を洗っているものと思われます。

『地にもの書く人』や『弟子の足を洗う』と同じように，あるいはそれ以上に田中忠雄が好んで数多く描いたのが『空の鳥を見よ』です（**図 3**)。学生時代に聴いた賀川豊彦の講演で，最も日本人に馴染みやすい主題としてこの場面が挙げられていたのが印象深かったようです。特にこの作品は日本におけるプロテスタント宣教 100 周年を記念して 1959 年に制作されたもので，現在は北海道立近代美術館に所蔵されています。この他にも 1967 年の木版画の『空の鳥を見よ』，あるいは 1991 年の横浜・捜真学院のステンドグラス『信・望・愛』の中心部分など，この主題の作品は様々な形式で各年代に制作されています。比べてみると，作品のスタイルもそれぞれに違っていることがわかります。

関西学院に次ぐ数の田中忠雄作品を所蔵していると思われる教育機関が, 青山学院です。私自身も 10 年ほど前に『坂を下る人々』と『鶏三度鳴くまで』の 2 点を寄贈し，現在はガウチャーホールという学内のチャペルの正面玄関に飾られています。特に前者は田中忠雄本人が気に入っていた作品で，1995 年に自宅のアトリエで家族に看取られて亡くなった際にも，この絵画はすぐそばに置かれていました。後者は，聖書の記述通りに題するなら『鶏鳴く前に三度』とすべきでしたが, 当の本人はあまり絵のタイトル等は気にしなかったようです。青山には，同じガウチャーホールの『燃えるエルサレムを見る預言者』をはじめ，『ペンテコステ』など他にも多数の作品があります。青山学院大学の渋谷キャンパスに近い渋谷教会には，先ほどの『坂を下る人々』の習作と思われる作品や，『マリヤとマルタの家にて』などがあります。この教会では他にも渡辺禎雄などの多数の聖書画を所蔵しています。

大学で言うと，荒井先生や私の母校である ICU には『エマオへの道』，おとなりのルーテル学院大学には『イザヤの預言』があります。このように，全国のキリスト教系の学校や，関連施設，教会などに田中忠雄の聖書画は数多く残されているのです。最後に 1 点，聖書画ではない代表作も紹介しておきます。本人の生まれ故郷，札幌の旧北海道庁舎には『島松での別離』という「少年よ大志を抱け」という言葉で有名なクラーク博士を描いた

作品があります。今や札幌の観光名所となっている場所に飾られているので，実は最も多くの人に見てもらっている田中忠雄作品は，これなのではないかと思います。

田中忠雄の生い立ちと家系

ではここから，田中忠雄がどのような生涯を送ったのかということをお話ししたいと思います。父親は田中兎毛（ともう）という珍しい名で，大阪の岸和田で生まれ，京都に出て新島襄のもとで学び，1886 年にこの地，仙台に赴任してきて東華学校の教員となり，翌年に設立された宮城組合教会の伝道師に任じられました。現在の仙台北教会の前身です。そこで出会った伊達藩士の娘，伊藤せいという女性と結婚し，その後，札幌北光教会の初代牧師となりました。そして，その札幌で 1903 年に，田中忠雄は生まれました。ですから，彼の出生地は北海道ですが，母方のルーツはこの仙台にあったのです。

ところで，田中忠雄の父親である田中兎毛牧師は，代々受け継がれてきた田中家の 10 代目でした。田中家の初代は 1500 年代の生まれなので，この地が伊達政宗公によって治められていた時代から長男，長男でずっと繋がって来た家系ということになります。兎毛の先代までは岸和田藩の藩士だったのですが，生まれてすぐの明治維新で廃藩置県となって武家の身分ではなくなってしまったので，一念発起して牧師の道に進みました。田中忠雄はその長男として生まれたので田中家の 11 代目ということになります。今はそのような「家の跡継ぎ」などということは意識されませんが，祖父や曽祖父の時代は違ったようです。祖父は長男でしたが 8 人兄弟の 6 番目，つまり姉が 5 人もいたのです。待望の跡継ぎ誕生に，きっと札幌北光教会の方々も大いに祝福してくださったのではなかったかと想像します。そして，そのような立場でこの世に生を受けたことは，田中忠雄の生き方にも影響していったのではないかと思います。

田中忠雄はその将来を予見させるように，幼少期から絵を描くことが好きだったようですが，ここでは一つ，それとは関係ないエピソードを紹介しておきます。忠雄には 5 人もの姉がいましたが，7 歳年下の妹が 1 人いました。その妹が，何と 2 歳で養女に出て行ってしまったのです。忠雄はその妹のことを本当に可愛がっていたようで，養女に行くその日まで，妹をそりに乗せて引っ張ってやるなど，遊び相手になっていました。妹との別離はとてつもなく悲しい体験で，忠雄はその後何日も泣いていたそうです。この時のことはよく覚えている，という話を私は当の二人から何十年も後に直接聞いています。

父親が神戸女子神学校に教頭として赴任するのに伴い，田中一家は神戸に引っ越し，忠雄は中学で小磯良平と出会います。当時はよく二人でスケッチに行っていたそうです。小

磯良平は後に東京藝術大学を優秀な成績で卒業し，母校の教授にまでなっています。17歳になった忠雄は兵庫教会にて，父・兎毛牧師から洗礼を受け，クリスチャンになりました。これは私の想像ですが，この頃の田中忠雄の心の中には自らの将来についての葛藤があったのではないかと思います。一番好きな絵を描き続ける人生，あるいは父の後を追って牧師への道を進む人生。しかし一方で，田中家11代当主として家族を養うだけでなく，一族の中心としての役割も果たさねばならない。結局，むしろ父親にそう勧められたこともあって京都高等工芸学校という，今で言う美大に当たるような学校に進学するのですが，学校では主にデザインや設計技術を学び，油彩画は独学だったようです。また級友たちの，いわゆる美大生のようなノリには馴染めず，休みの日には平安教会の青年会メンバーで山陽・山陰地方の農村部への伝道ツアーなどを積極的に行っていました。そして卒業後もすぐに画家を目指すのではなく，個人的に絵は学びつつも今で言う公務員のような堅い仕事に就き，都市開発や設計の仕事に携わるようになりました。学業を終えた田中忠雄が最初に選んだのは，田中の家，家族，親族らを，田中家の直系嫡男として守っていくという人生だったのです。

画家としての才能の開花と挫折，そして戦争体験

堅実な人生を選択した田中忠雄でしたが，すぐに転機が訪れます。就職してわずか2年で二科展入選を果たすのです。フランス帰りの前田寛治の教えを受けるようになったことも影響していたと思います。そして1930年，その前年には福岡警固教会の中村正路牧師の長女・志津と結婚したばかりだったのですが，その妻も連れてフランス・パリに行き，約2年間の留学生活を送るのです。パリには当時，日本からも多数の芸術家が渡り住んでいましたが，彼らだけではなく多くの現地の画家とその作品にも直接触れ，大いに刺激を受けたようです。毎日のようにルーブルに通って，模写に励んだ時期もありました。ミレーの『乾し草を束ねる人たち』の模写作品などが残っています。その頃は特にミレーやクールベ，ドーミエなどに感化されたようで，田中忠雄本人が1932年に描いた『セーブル風景』という作品にもその特徴が見て取れます。落ち着いた色調の写実的な風景画で，後の代表作のようなタッチや色づかいは見られません。同じ年に描かれた『パンを切る老人』という作品に当時の田中忠雄の画風が出ているのではないかと思います（**図4**）。この年齢になってもまだ一人で働かなければならない老人の質素で孤独な食生活，そんな社会のリアルな情景を描いているように見えます。若き日の田中忠雄はこのような労働者など，社会の中で何かの役割を担っている人物を入れた場面を好んで描いていました。ただ，

ルオーのような表現主義の画風にはまだたどり着いていません。

帰国後，いよいよ本格的に画家への道を歩み始めた田中忠雄でしたが，すぐに成功を収めたわけではありませんでした。二科展入選やパリ留学の経験があっても，絵が売れなければ生活していけません。子どもも生まれ，家族を養うためにまた設計の仕事も請け負うようになりますが，今度はそれで絵を描く時間が削られてしまう。その頃，大陸には日本が戦争でその地域の権益を得て樹立した満州国がありました。日本以外の各国からも移民が流入して景気が急上昇していたこの国に行けば絵が売れる，そんな時流に乗って田中忠雄も数度，大陸に渡ります。個展を開けば絵は完売，ついには満州国政府にも絵を買い上げてもらうなど，ようやく画家としての収入で家族を養えるようになりました。

しかし，1940 年代になると日本は戦争への道を突き進んでいくことになります。日本の画家たちもそれに巻き込まれ，従軍画家として大陸の日本軍に帯同したり，戦争画を依頼されたりするようになりました。そんな時期に田中忠雄が描いた，『麦の話』という作品に私は注目したいと思います（**図 5**，37 ページ）。戦前・戦中の作品のほとんどは残念ながら焼失してしまい，この作品も写真しか残っていないのですが，ここに描かれているのはおそらく大陸のどこかの農村で，軍服を着た日本兵と現地の農業従事者がその年の作物の出来について話し合っているように見えます。この日本兵も，国に帰れば自分の田畑を耕すことが本業なのではないかと思います。いわゆる戦争画とは程遠い，同業者同士の対話を描いた平和な光景に見えますが，戦時下であるという現実も確かにそこには存在しています。そしてもう 1 点，翌年の 1943 年に描かれた『元帥に誓う』という作品で，これは国民総力決戦美術展で朝日新聞社賞を受賞しています（**図 6**）。当時の満州にあった軍需工場での一場面ですが，工員たちが日本軍の総司令官である元帥と「自分たちも共に闘う」ことを誓って黙祷しているように見えます。少なくとも展覧会の開催者たちはこの作品をそう評価したのでしょう。しかし，この工員たちが本当に何を祈っているのかは誰にもわかりません。大陸の軍需工場は敵軍の攻撃対象でしたから，「早く戦争が終わってほしい，生きて日本に帰りたい」と願っていたかもしれないのです。田中忠雄本人は，どんな思いでこの作品を描き，出品したのでしょうか。

2 年後の 1945 年，第二次世界大戦は敗戦国となった日本をはじめ世界各国に深い傷跡を残して集結します。終戦の直前，田中忠雄は当時，東京・世田谷にあった自宅とそれまでに描きためていた作品のほとんどを焼失します。家族はかろうじて難を逃れましたが，一家は札幌の親戚を頼って疎開することを余儀なくされます。終戦までの田中忠雄の画家としての足跡は，作品がほとんど残っていないこともあって，断片的にしか見返すことができません。しかし私は，結果的にこの時期の体験がその後の彼の作品の礎になったのだ

と思っています。

戦後の聖書画制作に込められた想い

終戦後，田中忠雄は仲間たちと共に行動美術協会で新たな芸術活動を始めます。活動拠点も疎開先の札幌から東京に戻し，その画風にも少しずつ変化が見られ始めます。戦後の数年の間に描かれたオルガンを弾く女性たち。聖書画ではありませんが，場所は明らかに礼拝堂の中です。特に 1949 年の『オルガンを弾く婦人』の背景に見えるのは，この東北学院大学のラーハウザー記念礼拝堂のステンドグラスです（**図 7**）。この油彩画は現在，大学の学院長室に飾られているとのことです。1950 年には『みくにを来たらせ給え』という，礼拝での祈りの場面を描いた作品も制作されています。

さて，戦後に建てられた田中忠雄の家の居間には，一人の少年の肖像画が飾られていました。物心のついたばかりの私はその絵を見て自分がモデルかと勘違いするほど，幼少期の私によく似ていたのですが，それもそのはず，肖像画に描かれていたのは田中忠雄の次男の田中忠，私の叔父に当たる人だったのです。しかし彼は戦時中に，わずか 2 歳で病死してしまっていました。田中家では毎年，その叔父の命日に祈念の家族礼拝が行われ，何十年もの時が過ぎても，祖父はそのたびに涙を流していました。叔父は戦死したわけではなかったのですが，死因は当時の流行り病で，終戦後の医療の普及と衛生環境の改善によって，その病で子どもが亡くなることは稀になりました。つまり，あんな戦争がなかったら，叔父は死なずに済んだかもしれない，ということになります。2 歳児との別れ，それは田中忠雄にとって養女に行く妹を見送って以来，人生で二度目のことでしたが，我が子との死別というのは例えようもない悲しみをもたらしたのではないかと思います。

本日のこの講演のサブタイトル，「田中忠雄はなぜ聖書画を描くようになったのか」。ご覧いただいてきた通り，戦前・戦中までの作品の中に聖書画は見られません。多くの作品が戦災で焼失してしまったので明言はできませんが，若き日の田中忠雄の画風は写実的で，人物画や風景画が多かったようなのです。しかし，『基地のキリスト』と同じ 1953 年に制作されたのがこの『戦後日本に再臨するキリスト』です（**図 8**）。背景には富士山をはじめとする，自然豊かで美しい日本の国土が描かれています。これも厳密にいえば聖書画ではありませんが，もう二度と戦争などしない，平和な国として日本が復興していくことへの願いが込められているように思えます。満州国で絵が売れたり，従軍画家ではなくとも大陸の日本軍に帯同する経験をしたり，国民の戦意高揚を目的とした展覧会で賞を取ってしまったり，間接的にではあっても戦争の恩恵にあずかったり，戦争に協力してしまっ

た，という反省が田中忠雄の心の中に残ったのではないでしょうか。そして何よりも，愛する次男を戦時中に失ってしまったということ。その責任の一端は自分自身にもあるという，強い後悔の念があったのではないかと思うのです。毎年の次男の追悼祈念会で涙する祖父を見て，私はそんな風に感じていました。

もう二度と戦争を起こしてはならない。戦争になれば自国他国を問わず，多くの人が犠牲となり，その中には幼い子どもたちも含まれることがあります。そんな悲劇が起こることのない，平和な世界を築いていくために，画家である自分にできることは何か。その答えが聖書画を描くことだったのではないかと思うのです。第二次世界大戦以降，確かに日本は戦争をしない国になりました。しかし世界では依然として，どこかで戦争が続けられ，今なお戦災から逃れてさまよう人々がいます。そうした戦争にはっきりと異を唱えていない日本にも，責任がないとは言えません。1966 年の 150 号の大作『出エジプト記』には，モーセに導かれてエジプトを脱し，荒野を進むイスラエルの民が描かれていますが，この作品が描かれた時代背景にはベトナム戦争があり，多くの難民が国外に脱出していました。この作品は現在，田中忠雄がかつて教鞭をとっていた武蔵野美術大学が所蔵しています。

戦争のない世界を築き，平和を維持していくためには，世界中の人々が本気でそれに取り組む必要があります。しかし実際には，私たちは目先の欲や名声にとらわれ，本当に目指すべきものを見失いがちです。1961 年の『バベルの塔』は，聖書に書かれているバベルの塔ではなく，現代に至るまでの私たちがただただ高さを競って建て続けてきた高層建造物の積み重ね，という文明発達至上主義を皮肉っているような作品です。一方，1979 年の『ユダの手だけが汚れていたのではない』では，ユダの裏切りの陰で暗躍していた権力者たちと，当時の日本で問題になっていた政治家や企業の汚職事件の容疑者らを重ね合わせて描いています。田中忠雄は，最初に紹介したように聖書の場面そのものを描く一方で，このようなその時その時の世界情勢や社会問題と聖書の場面を組み合わせて描くことも少なくありませんでした。

慈愛に満ちた世界で共に生きるということ

戦後になって，田中忠雄が聖書画を描くようになった背景には，戦争や社会問題に対する批判的な精神がある，というような話をしてきました。しかしもちろん，それだけではありません。同じ時期に霊南坂教会の会員であった大中寅二氏が天に召された際には，聖歌隊を率いていた彼を偲んで『ダビデの歌』という作品を描きました。『彼女の目はひらかれた』はキリストが盲人を癒す場面ですが，この作品には目を患った画友のための祈り

が込められています。『湖畔の旅人』はガリラヤ湖が背景のようにも見えますが，実は自分より先に旅立っていった行動美術協会創立会員の在りし日を思い出して描かれました。大切な仲間や友人に対する田中忠雄の想い，優しさが伝わってきます。そして最後に，私が個人的に一番好きな作品，1982 年の『イエスと幼子』です（**図 9**）。キリストを慕って集まって来た子どもたちに向けられたキリストの温かな眼差しには，田中忠雄本人のそれが重なって見えます。幼き日の私自身もモデルの一人としてここに描いてもらっており，この作品は今も大切にとってあります。

20 世紀という時代の前半，若き日の田中忠雄は絵画を学びつつ，戦争という苦難を乗り越えました。戦後は主に聖書画を描くようになり，そこに込められた彼の祈りは，平和で慈愛に満ちた世界の実現でした。生誕 120 年を迎えましたが，田中忠雄の作品は今もなお，多くの人々にそのメッセージを伝え続けています。私は，そんな祖父の孫として生まれてきたことを誇りに思い，幸せに感じております。ご清聴ありがとうございました。

※鐸木道剛先生の訃報に寄せて

講演終了後の質疑応答で，3 名の方からのご感想やご意見をいただきました。その中で真っ先に手を挙げられたのが東北学院大学の美術史の前教授，鐸木道剛先生でした。先生は田中忠雄の業績についてコメントしつつ，今後もさらにこのような田中忠雄に関する活動が継続されることを強く希望しておられました。実は私がこの講演をお引き受けすることになった際，先生は過去にご自身が田中忠雄について書かれた文章なども読ませてくださり，美術が専門分野ではない私にとっては勉強になることばかりでした。この講演録を執筆しているさなかの 2024 年 2 月 15 日，先生は天に召されました。生前に賜った数々の教えを心にとどめつつ，神様の御許に帰られた鐸木先生に，この拙文を捧げたいと思います。

図 1

図 2

図 3

図 4

図 1.　『キリストの復活』東北学院大学・泉キャンパス
1988（昭和 63）年　ステンドグラス
図 2.　『基地のキリスト』東京国立近代美術館 蔵
1953（昭和 28）年　油彩画
図 3.　『空の鳥を見よ』北海道立近代美術館 蔵
1959（昭和 34）年　油彩画
図 4.　『パンを切る老人』兵庫県立美術館 蔵
1932（昭和 7）年　油彩画

図 5

図 6

図 7

図 8

図 9

図 5.　『麦の話』（亡失）1942（昭和 17）年
図 6.　『元帥に誓う』（亡失）1943（昭和 18）年
図 7.　『オルガンを弾く婦人』東北学院大学 蔵
1949（昭和 24）年　油彩画
図 8.　『戦後日本に再臨するキリスト』
東神戸教会 蔵　1953（昭和 28）年
油彩画
図 9.　『イエスと幼子』個人蔵
1982（昭和 57）年　油彩画